

## イタリアマルクス主義批判

グラムシについてのノート

野 島 三 郎

### 一、グラムシとトリアッチ

現在、スターリン主義は、中ソ対立を基軸として東欧諸国の自立化・各国共産党内部対立の激化といった世界的分解と流動化を深めており、いかなる力もこの必然的過程を押しとどめることができない。しばしの膠着状態も、さらにドラスチックな局面を準備するものにすぎない。今日、スターリン主義の理論的命脈は、毛沢東主義とトリアッチ主義によってかろうじて支えられている。

トリアッチは、自己の本質をイタリアと全世界プロレタリアートの前に公然と暴露することなく自然死した。一九三〇年代から戦前・戦後を通じてトリアッチは、ソ連におけるスターリン主義の専制と失政を擁護し、コミンテルンの指導者としてスターリン主義的な国際犯罪＝反革命的政策的を美化する優れた理論家であった。かれは、ポーランド共産党の解体、スペイン革命の絞殺、イタリア戦後革命の敗北の直接的な責任者であった。

あたかもスターリンがレーニンに対してそうであったように、トリアッチはグラムシを自己の師とし、今日のイタリア・マルクス主義を基礎づけたものとしてグラムシの権威をもちだす。だが、当のグラムシの思想と行動とはいかなるものであろうか。はたして、それはトリアッチの思想と行動を正当化するものであろうか。むしろ、グラムシとトリアッチとの相違は、今日とくに明白になりつつあるのではなからうか。

グラムシの革命的マルクス主義が、トリアッチの「創造的マルクス主義」＝スターリン主義のイタリア型にまで「分子的变化」をひきおこしてきたこれまでの過程は、トリアッチの死によって一段階を劃された。一切の汚物をグラムシから洗いおとすことによって、分解しつつあるトリアッチ信奉者の革命的マルクス主義への「分子的变化」を傾向的につくりあげること、革命的マルクス主義をより豊富なものにしていく作業の一部として極めて重要である。以下はその最初の手がかりを与えるためのものである。

## 二、グラムシと工場評議会

グラムシの革命的思想は、第一次大戦後、一九一七年のロシア革命の影響を受けて爆発したイタリア、とくにその革命の首都トリノのプロレタリアを中心とする巨大な革命的高揚の中で最初に形成された。共産主義的グループに指導されたこの時期（一九一八―一九二一年）の活動の指標は、トリノ評議会運動（彼にとってコミニューン・ソビエト型運動として意義をもつ）と、その敗北の教訓としてのイタリア共産党の創立（当時コミンテルンに加盟していたイタリア社会党の改良主義的うらぎりと、それを実際的にはようごするセラチイの中間派を弾がいし、真実のプロレタリア党のための闘争にふみ切った）という二つの事業にある。

二一年にはじまる党のための闘争は、戦後革命の敗北にフランスの抬頭という最も困難な闘いのなかで反ファシズム闘争と党のための闘争としてはじめられた。この闘いは二二年から二三年までのソ連滞在（ロシア革命の系統的研究を行なう）、党内右翼日和主義者タスカ派および左翼小児病ボルディガ派との闘争、二四年の党機関紙「ウニタ」の発刊、二四年から逮捕されるまでの国会議員の肩書きを利用した活動という全分野を貫徹して闘われた。

生涯の最後の期間はファシストの牢獄内での闘争である。創造的なものとしてのグラムシのマルクス主義は通常、彼が一九二六年にファシストに逮捕・投獄されてから三七年の病死までの間に記した龍大な『獄中ノート』のうちにあるとされている。だが、一九二〇年の工場評議会の運動を指導したグラムシの「新秩序」（オルディネ・ヌオヴオ）の闘い、党のための闘争を無視しては、二六年か

ニン起草による「共産党インターナショナルの根本任務に関するテーゼ」（二〇年七月）は「新秩序」の綱領についてつぎのように述べている。イタリア社会党の「トリノ支部が同党全国評議会に提起し、かつ一九二〇年五月八日の紙上に発表された提案が、共産党インターナショナルの全基本方針と一致することを認める」と。

一九一九―二一年の綱領（選集1および5に収められている）がグラムシの思想と「つながるものでない」ならば、単に共産党を創立するに至るまでの社会党内での闘争のみならず、この綱領に立脚し、その実現のためにたたかわれたタスカおよびボルディガの左右両派との党内闘争、さらにファシズムとの闘争とさえも「つながるものではない」ことになるであろう。トリアッチにあっては、グラムシの思想と行動の特定の部分を孤立化して評価してはならない、という正しい考え方は、グラムシの全行動と全思想の「基礎となりえた特定の政治綱領」を否定するために主張されている。

ジェルラターナはトリアッチの言葉をひきついでさらに何が問題なのかを明白にしている。

「イタリア労働運動の一定の闘争の瞬間に歴史的に現われた特殊な制度、たとえば『新秩序』の運動における工場評議会を孤立させ、それをグラムシの思想の中心とし、彼のレーニン主義の唯一の証明とすることは不条理である。そして『権力機関としての評議会の恒久的機能という反歴史的（ノ）な考え方を否定してジェルラターナはいう。『トリアッチは評議会の積極的機能を、その教育的価値に、革命的能力の鼓舞者ということに引きもどした。これと同じ意味でグラムシその人の確な認識も存在しているが、そうしたグラムシの認識を『無視できる』のは一九一九―二〇年の革命

らの獄中闘争に反ファシズム闘争に党のための闘争を理解することはできない。

だから一見すると『獄中ノート』に対するトリアッチのつぎのような意見は全く正しいようにみえる。

「各部分を人為的に寄せ集めようとする者を批判しなければならぬ」「この著作の導きの糸が存在することはたしかだが、しかしこれは、青年時代から出発し、ファシズムの権力掌握、逮捕、そしてその後へとつぎつぎと展開されていった現実の活動のなか以外には見いだすことはできない」「獄中の諸著述のなかには、一見してわかるとおり、それ以前の年月の闘争の反響あるいはそれへのとらわれない反省だけでなく、この闘争そのものの継続があり、闘争のあらゆる主題の深化と新しい諸条件への適応を指すこれらの主題の発展がある」と。

ところでトリアッチはこの言葉についてつぎのようになることによつて以上の正しい主張が純粹の形式主義的な主張にすぎないことを暴露する。「こうしてグラムシの政治思想はその有効性と真理との証拠を提示する。これは一九二二年の共産党創立の基礎となり得た特定の政治綱領につながるものではない。特殊な情勢が要求した一連の特定の戦略的・戦術的運動につながるものでさえない」と。

『獄中ノート』が二一年の「党創立の基礎となりえた特定の政治綱領につながるものではない」ならば、それは工場評議会運動とその指導部であった「新秩序」につながるものではない。なぜなら、党創立の基礎は「新秩序」の綱領（選集1「社会革新のために」）他ならないからである。コミンテルン第二回大会で採択されたレー

の経験と、その後のグラムシの思想と行動の発展との関連を顧みない」「もっぱらこの誤ったやり方によつてである。」

トリアッチはグラムシの「陣地戦」論に関連させて次のように述べている。

「進歩勢力と労働者階級の党が権力を獲得する以前に展開する行動は、それ以前の歴史的発展の結果である社会の政治組織のなかで、有効なものとは有効でないもの、保存できるもの、修正しなければならぬもの、破壊しなければならぬものを区別するにいたる。あまりに特殊な問題に首を突込まなくても議会制度の問題をこの光のもとで見なければならぬことは明らかである。プロレタリア革命に対して、かつて議会制度が存在したことのない国に、議会制度をつくることを要求することは馬鹿げたことであった。しかし、議会が、審議と人民の意志の表現の形態として、民主主義の内容をもつことに成功した他の国々には、議会という手段によつても、勤労大衆を、たんに自分たちの意志の表現ばかりでなく経済生活と政治生活の指導への積極的な参加に接近させる問題——労働者階級の権力への接近がつねに直接民主主義の形態の拡大を意味していることは依然としてたかではあるが——を解決できる。」（グラムシとレーニン主義「グラムシ研究Ⅲ」）

このようなトリアッチ、ジェルラターナのグラムシ理解、一九一九年―二一年のトリノの運動と『獄中ノート』を対立させる主張は正しいものであるうか。いや『獄中ノート』はそのようなものとしてトリノの運動を一度でも評価したことがあるだろうか。そしてそれはそのようなものとしてトリアッチと今日のイタリア共産党の「構造改良」を擁護し、一九四三年―四七年までの戦後革命におけるプ

ルジョア支配の復興を助けたイタリア共産党のうら切りを正当なものとし、それを自らの発展物として認めるようなものとしてあるの  
だろうか。それともむしろトリアッチの戦後革命のうら切りとその  
延長としての今日の「構造的改良」に対立する内容をもち、まさしく  
自己の源泉としての一九一九—一九二〇年の工場評議会運動<sup>II</sup> 二年  
党創立の基礎となった綱領にたえずたちもどり、その勝利的実現の  
ための、その思想の深化、具体化のために『獄中ノート』はあるの  
だろうか。

トリアッチのみならず日本においても多くのグラムシ理解  
が、初期の「極めて強固な一箇のソヴェト主義者、暴力革命論者で  
あった」グラムシが『獄中ノート』への発展過程において「今日の  
イタリア・マルクス主義の理論的・実践的支柱を形成することとな  
った」(柴田高好)といったきわめて機械的なものにおちいつている。  
そればかりか選集の2巻と5巻に収められている初期のものが単なる  
レーニンとコミンテルンの焼きなおしでなく、レーニンとコミン  
テルンに学びつつ、すでにきわめて独創的なものとしてあること、  
トリノ・プロレタリアの実践とその指導を基礎に哲学的とさえいえる  
深い政治論文集であるということが、今日、全然理解されていな  
いことである。このことはひとつにはトリアッチを手引きとするこ  
とから理解をはじめるといふ権威主義的方法によって、しかもその  
うえ(日本だけでなくイタリアにおいてさえもこれまで)かざられ  
た論文しか刊行されていないという事情によって一層うながされて  
いる。(なお刊行されている論文は、ほとんど一八年—二二年の「新  
秩序期」と後期の『獄中ノート』期のものであって、中期の二二年  
以降から二六年までのものは数篇にもみえず、とくに二三年までの

政治学を展開した「新君主論ノート」(青木文庫)に依拠して自己  
を語るべき、もちろんグラムシにその責任が全然ないわけではない  
(この点については後述する)。

ところで彼のマルクス主義への貢献はレーニンのヘゲモニー概念  
の深化、精密化にあるとされている。たしかに彼の政治学はヘゲモ  
ニー概念がその全骨格となることによって成立している。つまり  
「新君主論」は「ヘゲモニー論」なのであり、マルクス主義政治学  
はプロレタリアヘゲモニー論を基礎としてのみ成立するのである。  
このことはちよつと深く考えればわかることであるが、このことは  
一切のトリアッチ主義的理解を前提的に排除するものであるという  
ことである。「実践の哲学の研究のための若干の問題点」でグラム  
シはつぎのようにのべている。「従属的集団が現実的に自律的となり、  
主導的となり、新しい国家を喚びおこすようになる時から、新しい  
知的道徳的秩序、すなわち新しい型の社会を建設する必要、したが  
ってもつとも洗練されたもつとも決定的なイデオロギー的武器をき  
たえあげる必要が生ずる。」(『グラムシ選集』1—2—3—4—5—6—7—8—9—10—11—12—13—14—15—16—17—18—19—20—21—22—23—24—25—26—27—28—29—30—31—32—33—34—35—36—37—38—39—40—41—42—43—44—45—46—47—48—49—50—51—52—53—54—55—56—57—58—59—60—61—62—63—64—65—66—67—68—69—70—71—72—73—74—75—76—77—78—79—80—81—82—83—84—85—86—87—88—89—90—91—92—93—94—95—96—97—98—99—100—101—102—103—104—105—106—107—108—109—110—111—112—113—114—115—116—117—118—119—120—121—122—123—124—125—126—127—128—129—130—131—132—133—134—135—136—137—138—139—140—141—142—143—144—145—146—147—148—149—150—151—152—153—154—155—156—157—158—159—160—161—162—163—164—165—166—167—168—169—170—171—172—173—174—175—176—177—178—179—180—181—182—183—184—185—186—187—188—189—190—191—192—193—194—195—196—197—198—199—200—201—202—203—204—205—206—207—208—209—210—211—212—213—214—215—216—217—218—219—220—221—222—223—224—225—226—227—228—229—230—231—232—233—234—235—236—237—238—239—240—241—242—243—244—245—246—247—248—249—250—251—252—253—254—255—256—257—258—259—260—261—262—263—264—265—266—267—268—269—270—271—272—273—274—275—276—277—278—279—280—281—282—283—284—285—286—287—288—289—290—291—292—293—294—295—296—297—298—299—300—301—302—303—304—305—306—307—308—309—310—311—312—313—314—315—316—317—318—319—320—321—322—323—324—325—326—327—328—329—330—331—332—333—334—335—336—337—338—339—340—341—342—343—344—345—346—347—348—349—350—351—352—353—354—355—356—357—358—359—360—361—362—363—364—365—366—367—368—369—370—371—372—373—374—375—376—377—378—379—380—381—382—383—384—385—386—387—388—389—390—391—392—393—394—395—396—397—398—399—400—401—402—403—404—405—406—407—408—409—410—411—412—413—414—415—416—417—418—419—420—421—422—423—424—425—426—427—428—429—430—431—432—433—434—435—436—437—438—439—440—441—442—443—444—445—446—447—448—449—450—451—452—453—454—455—456—457—458—459—460—461—462—463—464—465—466—467—468—469—470—471—472—473—474—475—476—477—478—479—480—481—482—483—484—485—486—487—488—489—490—491—492—493—494—495—496—497—498—499—500—501—502—503—504—505—506—507—508—509—510—511—512—513—514—515—516—517—518—519—520—521—522—523—524—525—526—527—528—529—530—531—532—533—534—535—536—537—538—539—540—541—542—543—544—545—546—547—548—549—550—551—552—553—554—555—556—557—558—559—560—561—562—563—564—565—566—567—568—569—570—571—572—573—574—575—576—577—578—579—580—581—582—583—584—585—586—587—588—589—590—591—592—593—594—595—596—597—598—599—600—601—602—603—604—605—606—607—608—609—610—611—612—613—614—615—616—617—618—619—620—621—622—623—624—625—626—627—628—629—630—631—632—633—634—635—636—637—638—639—640—641—642—643—644—645—646—647—648—649—650—651—652—653—654—655—656—657—658—659—660—661—662—663—664—665—666—667—668—669—670—671—672—673—674—675—676—677—678—679—680—681—682—683—684—685—686—687—688—689—690—691—692—693—694—695—696—697—698—699—700—701—702—703—704—705—706—707—708—709—710—711—712—713—714—715—716—717—718—719—720—721—722—723—724—725—726—727—728—729—730—731—732—733—734—735—736—737—738—739—740—741—742—743—744—745—746—747—748—749—750—751—752—753—754—755—756—757—758—759—760—761—762—763—764—765—766—767—768—769—770—771—772—773—774—775—776—777—778—779—780—781—782—783—784—785—786—787—788—789—790—791—792—793—794—795—796—797—798—799—800—801—802—803—804—805—806—807—808—809—810—811—812—813—814—815—816—817—818—819—820—821—822—823—824—825—826—827—828—829—830—831—832—833—834—835—836—837—838—839—840—841—842—843—844—845—846—847—848—849—850—851—852—853—854—855—856—857—858—859—860—861—862—863—864—865—866—867—868—869—870—871—872—873—874—875—876—877—878—879—880—881—882—883—884—885—886—887—888—889—890—891—892—893—894—895—896—897—898—899—900—901—902—903—904—905—906—907—908—909—910—911—912—913—914—915—916—917—918—919—920—921—922—923—924—925—926—927—928—929—930—931—932—933—934—935—936—937—938—939—940—941—942—943—944—945—946—947—948—949—950—951—952—953—954—955—956—957—958—959—960—961—962—963—964—965—966—967—968—969—970—971—972—973—974—975—976—977—978—979—980—981—982—983—984—985—986—987—988—989—990—991—992—993—994—995—996—997—998—999—1000—1001—1002—1003—1004—1005—1006—1007—1008—1009—1010—1011—1012—1013—1014—1015—1016—1017—1018—1019—1020—1021—1022—1023—1024—1025—1026—1027—1028—1029—1030—1031—1032—1033—1034—1035—1036—1037—1038—1039—1040—1041—1042—1043—1044—1045—1046—1047—1048—1049—1050—1051—1052—1053—1054—1055—1056—1057—1058—1059—1060—1061—1062—1063—1064—1065—1066—1067—1068—1069—1070—1071—1072—1073—1074—1075—1076—1077—1078—1079—1080—1081—1082—1083—1084—1085—1086—1087—1088—1089—1090—1091—1092—1093—1094—1095—1096—1097—1098—1099—1100—1101—1102—1103—1104—1105—1106—1107—1108—1109—1110—1111—1112—1113—1114—1115—1116—1117—1118—1119—1120—1121—1122—1123—1124—1125—1126—1127—1128—1129—1130—1131—1132—1133—1134—1135—1136—1137—1138—1139—1140—1141—1142—1143—1144—1145—1146—1147—1148—1149—1150—1151—1152—1153—1154—1155—1156—1157—1158—1159—1160—1161—1162—1163—1164—1165—1166—1167—1168—1169—1170—1171—1172—1173—1174—1175—1176—1177—1178—1179—1180—1181—1182—1183—1184—1185—1186—1187—1188—1189—1190—1191—1192—1193—1194—1195—1196—1197—1198—1199—1200—1201—1202—1203—1204—1205—1206—1207—1208—1209—1210—1211—1212—1213—1214—1215—1216—1217—1218—1219—1220—1221—1222—1223—1224—1225—1226—1227—1228—1229—1230—1231—1232—1233—1234—1235—1236—1237—1238—1239—1240—1241—1242—1243—1244—1245—1246—1247—1248—1249—1250—1251—1252—1253—1254—1255—1256—1257—1258—1259—1260—1261—1262—1263—1264—1265—1266—1267—1268—1269—1270—1271—1272—1273—1274—1275—1276—1277—1278—1279—1280—1281—1282—1283—1284—1285—1286—1287—1288—1289—1290—1291—1292—1293—1294—1295—1296—1297—1298—1299—1300—1301—1302—1303—1304—1305—1306—1307—1308—1309—1310—1311—1312—1313—1314—1315—1316—1317—1318—1319—1320—1321—1322—1323—1324—1325—1326—1327—1328—1329—1330—1331—1332—1333—1334—1335—1336—1337—1338—1339—1340—1341—1342—1343—1344—1345—1346—1347—1348—1349—1350—1351—1352—1353—1354—1355—1356—1357—1358—1359—1360—1361—1362—1363—1364—1365—1366—1367—1368—1369—1370—1371—1372—1373—1374—1375—1376—1377—1378—1379—1380—1381—1382—1383—1384—1385—1386—1387—1388—1389—1390—1391—1392—1393—1394—1395—1396—1397—1398—1399—1400—1401—1402—1403—1404—1405—1406—1407—1408—1409—1410—1411—1412—1413—1414—1415—1416—1417—1418—1419—1420—1421—1422—1423—1424—1425—1426—1427—1428—1429—1430—1431—1432—1433—1434—1435—1436—1437—1438—1439—1440—1441—1442—1443—1444—1445—1446—1447—1448—1449—1450—1451—1452—1453—1454—1455—1456—1457—1458—1459—1460—1461—1462—1463—1464—1465—1466—1467—1468—1469—1470—1471—1472—1473—1474—1475—1476—1477—1478—1479—1480—1481—1482—1483—1484—1485—1486—1487—1488—1489—1490—1491—1492—1493—1494—1495—1496—1497—1498—1499—1500—1501—1502—1503—1504—1505—1506—1507—1508—1509—1510—1511—1512—1513—1514—1515—1516—1517—1518—1519—1520—1521—1522—1523—1524—1525—1526—1527—1528—1529—1530—1531—1532—1533—1534—1535—1536—1537—1538—1539—1540—1541—1542—1543—1544—1545—1546—1547—1548—1549—1550—1551—1552—1553—1554—1555—1556—1557—1558—1559—1560—1561—1562—1563—1564—1565—1566—1567—1568—1569—1570—1571—1572—1573—1574—1575—1576—1577—1578—1579—1580—1581—1582—1583—1584—1585—1586—1587—1588—1589—1590—1591—1592—1593—1594—1595—1596—1597—1598—1599—1600—1601—1602—1603—1604—1605—1606—1607—1608—1609—1610—1611—1612—1613—1614—1615—1616—1617—1618—1619—1620—1621—1622—1623—1624—1625—1626—1627—1628—1629—1630—1631—1632—1633—1634—1635—1636—1637—1638—1639—1640—1641—1642—1643—1644—1645—1646—1647—1648—1649—1650—1651—1652—1653—1654—1655—1656—1657—1658—1659—1660—1661—1662—1663—1664—1665—1666—1667—1668—1669—1670—1671—1672—1673—1674—1675—1676—1677—1678—1679—1680—1681—1682—1683—1684—1685—1686—1687—1688—1689—1690—1691—1692—1693—1694—1695—1696—1697—1698—1699—1700—1701—1702—1703—1704—1705—1706—1707—1708—1709—1710—1711—1712—1713—1714—1715—1716—1717—1718—1719—1720—1721—1722—1723—1724—1725—1726—1727—1728—1729—1730—1731—1732—1733—1734—1735—1736—1737—1738—1739—1740—1741—1742—1743—1744—1745—1746—1747—1748—1749—1750—1751—1752—1753—1754—1755—1756—1757—1758—1759—1760—1761—1762—1763—1764—1765—1766—1767—1768—1769—1770—1771—1772—1773—1774—1775—1776—1777—1778—1779—1780—1781—1782—1783—1784—1785—1786—1787—1788—1789—1790—1791—1792—1793—1794—1795—1796—1797—1798—1799—1800—1801—1802—1803—1804—1805—1806—1807—1808—1809—1810—1811—1812—1813—1814—1815—1816—1817—1818—1819—1820—1821—1822—1823—1824—1825—1826—1827—1828—1829—1830—1831—1832—1833—1834—1835—1836—1837—1838—1839—1840—1841—1842—1843—1844—1845—1846—1847—1848—1849—1850—1851—1852—1853—1854—1855—1856—1857—1858—1859—1860—1861—1862—1863—1864—1865—1866—1867—1868—1869—1870—1871—1872—1873—1874—1875—1876—1877—1878—1879—1880—1881—1882—1883—1884—1885—1886—1887—1888—1889—1890—1891—1892—1893—1894—1895—1896—1897—1898—1899—1900—1901—1902—1903—1904—1905—1906—1907—1908—1909—1910—1911—1912—1913—1914—1915—1916—1917—1918—1919—1920—1921—1922—1923—1924—1925—1926—1927—1928—1929—1930—1931—1932—1933—1934—1935—1936—1937—1938—1939—1940—1941—1942—1943—1944—1945—1946—1947—1948—1949—1950—1951—1952—1953—1954—1955—1956—1957—1958—1959—1960—1961—1962—1963—1964—1965—1966—1967—1968—1969—1970—1971—1972—1973—1974—1975—1976—1977—1978—1979—1980—1981—1982—1983—1984—1985—1986—1987—1988—1989—1990—1991—1992—1993—1994—1995—1996—1997—1998—1999—2000—2001—2002—2003—2004—2005—2006—2007—2008—2009—2010—2011—2012—2013—2014—2015—2016—2017—2018—2019—2020—2021—2022—2023—2024—2025—2026—2027—2028—2029—2030—2031—2032—2033—2034—2035—2036—2037—2038—2039—2040—2041—2042—2043—2044—2045—2046—2047—2048—2049—2050—2051—2052—2053—2054—2055—2056—2057—2058—2059—2060—2061—2062—2063—2064—2065—2066—2067—2068—2069—2070—2071—2072—2073—2074—2075—2076—2077—2078—2079—2080—2081—2082—2083—2084—2085—2086—2087—2088—2089—2090—2091—2092—2093—2094—2095—2096—2097—2098—2099—2100—2101—2102—2103—2104—2105—2106—2107—2108—2109—2110—2111—2112—2113—2114—2115—2116—2117—2118—2119—2120—2121—2122—2123—2124—2125—2126—2127—2128—2129—2130—2131—2132—2133—2134—2135—2136—2137—2138—2139—2140—2141—2142—2143—2144—2145—2146—2147—2148—2149—2150—2151—2152—2153—2154—2155—2156—2157—2158—2159—2160—2161—2162—2163—2164—2165—2166—2167—2168—2169—2170—2171—2172—2173—2174—2175—2176—2177—2178—2179—2180—2181—2182—2183—2184—2185—2186—2187—2188—2189—2190—2191—2192—2193—2194—2195—2196—2197—2198—2199—2200—2201—2202—2203—2204—2205—2206—2207—2208—2209—2210—2211—2212—2213—2214—2215—2216—2217—2218—2219—2220—2221—2222—2223—2224—2225—2226—2227—2228—2229—2230—2231—2232—2233—2234—2235—2236—2237—2238—2239—2240—2241—2242—2243—2244—2245—2246—2247—2248—2249—2250—2251—2252—2253—2254—2255—2256—2257—2258—2259—2260—2261—2262—2263—2264—2265—2266—2267—2268—2269—2270—2271—2272—2273—2274—2275—2276—2277—2278—2279—2280—2281—2282—2283—2284—2285—2286—2287—2288—2289—2290—2291—2292—2293—2294—2295—2296—2297—2298—2299—2300—2301—2302—2303—2304—2305—2306—2307—2308—2309—2310—2311—2312—2313—2314—2315—2316—2317—2318—2319—2320—2321—2322—2323—2324—2325—2326—2327—2328—2329—2330—2331—2332—2333—2334—2335—2336—2337—2338—2339—2340—2341—2342—2343—2344—2345—2346—2347—2348—2349—2350—2351—2352—2353—2354—2355—2356—2357—2358—2359—2360—2361—2362—2363—2364—2365—2366—2367—2368—2369—2370—2371—2372—2373—2374—2375—2376—2377—2378—2379—2380—2381—2382—2383—2384—2385—2386—2387—2388—2389—2390—2391—2392—2393—2394—2395—2396—2397—2398—2399—2400—2401—2402—2403—2404—2405—2406—2407—2408—2409—2410—2411—2412—2413—2414—2415—2416—2417—2418—2419—2420—2421—2422—2423—2424—2425—2426—2427—2428—2429—2430—2431—2432—2433—2434—2435—2436—2437—2438—2439—2440—2441—2442—2443—2444—2445—2446—2447—2448—2449—2450—2451—2452—2453—2454—2455—2456—2457—2458—2459—2460—2461—2462—2463—2464—2465—2466—2467—2468—2469—2470—2471—2472—2473—2474—2475—2476—2477—2478—2479—2480—2481—2482—2483—2484—2485—2486—2487—2488—2489—2490—2491—2492—2493—2494—2495—2496—2497—2498—2499—2500—2501—2502—2503—2504—2505—2506—2507—2508—2509—2510—2511—2512—2513—2514—2515—2516—2517—2518—2519—2520—2521—2522—2

妙な言葉ではあるが柴田に従って言えばプロレタリア「民主主義的自由」のための闘争であることがわかる。グラムシにとって「ヘゲモニーのための闘争」とはいつでもプロレタリア・ヘゲモニーのたのめ闘争のことであり、その立場からのみもう一つのヘゲモニーであるブルジョアジーのそれが分析されているのである。

グラムシが政治学の自律化にとりくんだのはプロレタリアートのヘゲモニーのための闘争を勝利的に導くためであり、この闘争の「段階においてその政治の科学が発展」するのは、プロレタリアートが独自の、自律的な階級として政治の領域に登場したからに他ならない。逆にプロレタリアートがそのようなものとして登場するやいなや、他の階級・階層に対してヘゲモニー的に支配集団的に関係することを知り、学び、つまり政治的に関係することが課題とならざるを得ない。このことはプロレタリアートが支配階級たりうるためにはマルクス主義政治学の確立が必須のものである、というグラムシの理解がひそんでいられる。

政治はいままでもなく人間の人間に対する不平等な関係を前提としていて、それ故にプロレタリアートは自己を等質なもの、独自のものとして登場させると共に他の等質たりえない階級・階層に対する支配をめざし、その支配を維持するために政治権力をからとり、そうして全社会的等質化政治の死滅にむかわなければならぬ。政治的支配をめざし、政治的支配のためのしかも一切の政治的諸関係に死滅させる階級の政治学、これがプロレタリアートの政治学としてのマルクス主義政治学である。

グラムシの生涯についていえばプロレタリアートを支配階級にたかめるための実践的・理論的追究につきる。

「トリノ共産主義者は、プロレタリアートのヘゲモニーの問題、すなわちプロレタリア独裁と労働者国家との社会的基礎の問題を具体的に提起したのである。プロレタリアートは階級同盟の組織をつくりだすことに成功するにつれて指導的かつ支配的階級になることができる。この階級同盟の組織によって、プロレタリアートは、勤労人民の大多数を資本主義とブルジョア国家に反対する行動にたちあがらせることができる。」それゆえに「トリノ共産主義者として解決すべき第一の問題は国家生活の全体のなかに存在し、無意識のうちに学校や新聞やブルジョアの伝統の影響におかされている国民的要求としてのプロレタリアート自身の政治方針とプロレタリアート自身の全体にかんするイデオロギーとを変更する問題であった。もし大衆自身のみならず到達しようとする目的や適用すべき方法について確信をもっていないならば大衆行動はおよそ不可能である。プロレタリアートは階級としての支配力をうるために、あらゆるギルドの残滓とサンディカリズムのあらゆる偏見ないしは狭い自ら取除かねばならない。これはなにを意味するか。職業間の差別が克服されねばならないだけでなく、農民と若干の都市半プロレタリア層との信頼および同意を勝ちとるためには若干の偏見を克服し、ある種のエゴイズム——労働者階級の内部では職業の持つ排他性が消えてしまってもなお階級としての労働者には存続しうるし、また実際存在している——にうちかつことが必要である。」「プロレタリアートとしてみずから考えねばならない。のみならずさらに一歩進んでつぎのように考えねばならない。すなわち農民と知識人とを指導することをめざし、これらの社会層の大多数の支援と後続がえられさえすれば、勝利し、社会主義をうちたてることができ

トリノで工場評議会運動の意義をプロレタリアートにいくどとなく強調するなかでグラムシは革命が直接的に「建設」であること、「新しい秩序」であること、大衆が自主的となることをのべてつぎのようにいつている。「国家権力をにぎった階級が負わねばならぬ義務についての責任意識を獲得」の意義（一九一九年）「評議会が存在することによって、労働者には生産の直接の責任が生じる。労働者はその労働を改善し、意識的・意志的な秩序をたて、生産者の心理、歴史的創造者の心理をつくりださねばならぬ」（一九一九年）「この階級にその歴史的目的を達成するように準備させるということとは、まさに、プロレタリアートを支配階級として組織することの意味する。」「統治の技術という点で、適切に指導権を発揮し、労働者国家の一般行動を展開する技術という点で、現在のブルジョアジーと同種の心理を身につけなければならない」（一九二〇年）と。（選集5巻より）

このようなものとして工場評議会を「新しい秩序」として政治権力として登場させつあったトリノのプロレタリアートは、不可避的にプロレタリアートが解決する以外に解決しえないばかりか、プロレタリアートがそれを課題としてひきうけることによってのみ国民的階級（プロレタリアート独裁）に自らをたかめうるそうした国民的課題にぶつかった。当時すでにトリノのグラムシを中心とする共産主義的グループとプロレタリアートは端的にこの課題をひきうけ、そのための闘争に入った。逮捕、投獄によって中断されてしまつた一九二六年の「南部問題にかんするいくかの主題」という未完の論文（選集2）で一九一九—二一年の運動を総括し高く評価してつぎのようになっている。

階級の一人である労働者として、これが遂行されなければプロレタリアートは指導階級とはならないし、イタリアにおいて住民の大多数を代表するこれらの諸層がブルジョアの指導下にとどまるならばプロレタリアートの攻撃に抵抗し、それを打砕く可能性をこれらの諸層は国家にあたえることになる」と。プロレタリアートがイタリアの国民的諸課題としての南部（農業問題、知識人、ヴァイカン問題）問題を自己の課題として考えなければならぬかつ、という当時のグラムシを中心とするトリノの共産主義グループの問題意識は、資本主義が帝国主義の段階に入ったことを物質的基礎にしている。プロレタリアートの国民的諸課題としての民族植民地問題、農業問題、財政問題、軍事、戦争問題、さらに労働問題（労働貴族の発生、組合主義、社会民主主義）それ自身さえも総じて帝国主義の問題なのである。このことはプロレタリアートの階級の利益を「国民的利益」に解消させる（例えば日本共産党の綱領、昨年の四・一七ストに対する態度）ことをなら意味しない。国民的諸課題・諸要求はプロレタリアートの階級の指導によるのみはじめて組織化することができるし、そうでない場合はグラムシのいうごとくプロレタリアートはブルジョアジーに決定的打撃を与えられることになる。実際プロレタリアートは他の階級、階層との闘争、同盟軍といった政治的諸関係のなかで実践的にみずから階級として認識し、等質化し、行動していくという一箇二重の関係において自己階級へ形成していくのである。

政治的領域に登場したプロレタリアートは、ヘゲモニーのための闘争を展開するが、それは、国民的諸課題の解決をブルジョアジーがいかに為して来たか、いかにして支配に到達したのか、たえず現

われる諸課題をどのように解決しようとしているのか、またはできないか、いかに支配しているのかの分析と考察にむかひざるをえない。つまりグラムシは「敵軍の掃蕩」（戦略目標）は「兵士を殺すこと」ではなく、有機的大衆としてのかれらの結合を解体させること、を意味する」という軍事著述家からの引用に註釈して「この定式は適切であり、政治の用語法のなかでも使うことができる。問題は、政治生活においてそれが本質的な有機的結合を認認することである。」とのべている。グラムシがたえずマキアヴェリ、ガリバルディ、マッツイーニなどのリソルジメント運動、ジョリッテイ主義、ファシズム、南部（農業）問題などを分析の対象にあげた理由なのである。

『獄中ノート』はそれ故にたえず二つの側面をとり扱っている。ブルジョアジーの政治生活における「本質的な有機的結合」点を明白にすることとプロレタリアートのヘゲモニー破壊のための闘争、とプロレタリア復興のための闘争、ブルジョア国家の秘密をあきらかにすることとプロレタリア国家の基礎をみいだすこととといった側面——つまり「二つのコンフォルミズム」間の闘争、すなわちヘゲモニーの闘争、国民社会の危機」として表現され、「ヘゲモニー」の概念は、国民的諸要求が一つの結び目をつくっている概念である。そうしたものとして「政治学は国家の科学を意味し、国家は、それによって指導階級が自己の支配を正当化し維持するのみならず、被統治者の能動的同意をかつとることのできる実践のおよび理論的活動の複合体である」とグラムシは規定したのである。

マルクス主義政治学が客観的な認識であるためには主体的な実践

ないばかりか勝利したとしても（第一次ハンガリア革命の敗北）独裁を維持することができない。「共産主義者は、労働者階級の直接当面する目的や利益のために闘う。だが共産主義者は現在の運動の中にあって、同時に運動の未来を代表する」（『共産党宣言』）そうした二重の形態における闘争がヘゲモニーのための闘争なのである。

ジノヴィエフの『ロシア社会民衆史』（戦前訳の復刻が長船社研より出版されている）によれば、ナロードニキのチホミロフが「革命のために労働者階級が重要である」とのべたことに対して、まだ革命的マルクス主義者であったブレハノフはこれを転倒して「革命が労働者階級のために大いに重要である」とプロレタリアートのヘゲモニーを強調したという。この問題はレーニンによって「純粹の社会革命を期待する人は、けっして社会革命にめぐりあえないであろう」（『自決にかんする討論の総決算』）という帝国主義段階階級についての把握に支えられたプロレタリアのヘゲモニー論として、民族植民地問題、農業問題、帝国主義戦争の問題のなかでたえずくりかえし深められている。実際レーニン主義のナロードニキ、経済主義、メンシエヴィキとの間の論争はすべてヘゲモニーをめぐる論争であった。

一九二〇年にグラムシはかいている。ロシア革命のあとをうけた西欧の革命の敗北は「破壊行為としての革命に、共産主義的な意味での建設的過程としての革命がつかなくなかった」ことによる。つまり（1）ブルジョア国家の政府打倒をめざすかぎりでは、たとえそれに成功しても、かならずしもプロレタリア革命ではなく、共産主義革命でもない。（2）代議機構と、中央政府がブルジョアジーの政治権力を行使するための行政装置とを、絶滅するかぎりでは、たとえそれ

と統一されなければならぬ。それ故に政治学を「なぜやるのか」という原理的な問は「政治そのものの否定、止場のために」（柴田高好『マルクス主義政治学序説』）というのでは全く不十分である。それはプロレタリアートの現在の任務、諸課題（ヘゲモニーのための闘争）との一箇二重の関係として統一されなければならぬ。現在と未来、存在と思惟、理論と実践との統一に支えられていないならば「民主主義」「自由」「政党」「ヘゲモニー」「独裁」「政治の死滅」などは抽象的な形式的把握にとどまるのである。

#### △ 四、グラムシのヘゲモニー論

プロレタリアートがその独裁を樹立し、それを維持することはその国民的階級への形成、ヘゲモニーのための闘争と全く同一のことである。またプロレタリアートの独裁という目標から逆限定されたプロレタリアの現在の闘争、これがヘゲモニーのための闘争である。このことは一九〇五年の『民主主義革命のための二つの戦術』でレーニンが社会主義革命ではなく「民主主義革命」を当面の任務としながら、民主主義的、国民的諸課題におけるプロレタリアートのヘゲモニーの強調が、ロシア革命の性格を社会主義革命と規定した『四月テーゼ』による党の再武装を必然化させざるをえなかったことに証明されている。レーニンの『二つの戦術』はその後あきらかに誤りをも含めて、その混乱自体が現在に未来を結合するための貴重なヘゲモニー理論の古典をなしている。

国民的、人民的、プロレタリアの諸課題に対するプロレタリアートのヘゲモニーのための闘争なくしてプロレタリアートは勝利でき

に成功しても、プロレタリア革命ではなく共産主義革命でもない。(3)大衆蜂起の大波によって、共産主義者といわれている（しかも真実まじめな共産主義者でもある）人びとの手に権力がわたったとしても、それはまだプロレタリア革命ではなく、共産主義革命でもない。革命がプロレタリア的、共産主義的生産力の解放であってはいない。革命はプロレタリア革命となり共産主義革命となるのだ。この生産力は、まさに資本家階級の支配する社会の内部で仕上げられたものである。生産と分配の諸関係の中に新しい秩序をうちたてるためには、しんぼう強い、秩序だった努力が必要だが、この努力を開始することのできるプロレタリア勢力、共産主義勢力が拡大し、大系化するのを、どれだけ助け、推進することができたかによって革命のプロレタリア性、共産主義性の程度がきまる。そして、生産と分配の諸関係のなかのこの秩序が確立するならば、この基礎のうえに階級に分裂した社会が立つことは不可能となるだろう。だから、この新秩序が体系的に発展する方向は、国家権力の衰滅の過程と一致する。つまり、プロレタリア階級の政治的防衛組織の体系的な解消と一致するのだ。そして、プロレタリア階級は、階級としては解消し、人類となるのである。（グラムシ選集5「二つの革命」一七七ページ）というソヴエト論と関連させてだされている考え方である。

この考え方をうけて『獄中ノート』においてもたえず革命が「破壊復興としてでなく、機械的に破壊として考えられていること」の危険を指摘し、一層それを理論的に発展させている。ここからその経済主義批判、ヘゲモニー理論、ソヴエトと政党といったヘゲモニー装置と統一戦線、同盟軍、陣地戦というヘゲモニーのための戦

術が追究され提起されているのである。グラムシはこうした問題について獄中でかいた「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展の上での政治指導の問題」(選集2巻)のなかでつぎのように述べている。「ある社会集団の至上性は、支配権」として、および、知集的ならびに道徳的指導」として、二つの仕方で見られる。ある社会集団は、それが武力に訴えても「一掃」ないしは服従させようとする敵対諸集団を支配する。そして近親諸集団と同盟諸集団を指導する。ある社会団は統治権を獲得する以前に、すでに指導的でありうるし、またむしろ指導的であらねばならぬ(これが権力獲得そのものにとつて主要な諸条件の一つである)。その後、その社会集団が権力を行使するとき、そしてなおもその権力を固く保持するならば、その社会集団は支配権を握ることになる。しかしこれらはなお「指導的」でもありつづければならないのである。こうした実践的な把握からグラムシの国家論が展開される。「ある社会集団の至上性」「国家」の二つの仕方のあらわれはつぎのようなものである。「さしあたって上部構造の二つの大きな次元」を確保することが出来る。一つは「市民社会」と呼ぶことのできるもの、すなわち俗に「民間」のものといわれている諸機構の全体の「次元」であり、他の一つは「市民社会」と呼ぶことのできるもの、すなわち支配的集団が全社会において行使する「ヘゲモニー」の機能である。それは、家や、法、治に実現される「直接支配」あるいは命令の機能に対応するものである。」「(選集3八八ページ) そうした「ヘゲモニー」を「置」として政党、組合、知識人、新聞、ラジオ、議会の役割りをあさらかにして「世論とよばれているものは、政治的ヘゲモニーと緊密に結びついており、市民社会」と政治社会」の、同意と強制

し、いうまでもなくレーニンが国家を支配階級の「武装部隊」であり、「暴力」と規定したことに対応している。「独裁」「暴力」は自然力ではなく、自然力と考えることはすでに国家に対する物神化におちいつているのである。だから「暴力」は「勢力要因」であり「武装部隊」でなければならぬ。つまり暴力は組織された人間なのである。それ故に国家は暴力的であるためには武装部隊でなければならず、市民を「公人」として組織していなければならない。市民はすべて「公人」であることが前提となり、一部は官僚、武装部隊である公職に、他の部分は官僚、武装部隊を「公人」としての自己の對象化されたものとしてみならず「国民」にならなければならない。つまり官僚、軍隊、警察は社会の公僕とみなされてはじめて、また国民から「公共的」とみなされてはじめて暴力部隊なのである。この場合すべての市民は「公人」と「私人」との自己分裂におちいり、その対象的表現として国家を「公のもの」、自己を「私なるもの」としてみだし、自らを組織する。利己的なるものとしての「私人」は国家を媒介にしてはじめて自己を「公人」としてみいだす。または「私人」としての自己は「公人」としての自己を国家にみいだすことよって国家を容認し、国家を強化する。このことは組織された武装部隊に対して、「一般の市民、国民は原子化され、細分化され、抽象化されること、つまりプロレタリアートは自らを階級として組織しえないことを意味する。「私人」「私利私害」「特殊利害」でしかない抽象的な原子化された市民、人民、国民は国家によって自己を組織するのであるが、このことは国家が「抽象的」「一般的」「共同的」「公共的」なものとしてみなされることよってである。国家が国家たりうるのは自らを「共同性の幻想」「幻想

の接点である。国家は、あまり人気のない行為をはじめようとするとき、まもなくしてそれに適した世論をつくりだす。すなわち市民社会のある要素を組織し、集中する。「世論とは、不一致になりうる公的な政治意志の政治的内容である。だから新聞、政党、議会など世論機関の独占をめぐる闘争がつぎのようにして存在するのである。すなわち、単一の勢力が、意見を、したがって国民的政治意志の原型をつくり、不一致を個々のばらばらの微粒として散らすというぐあいにしてである。」「すべてこうしたことは、三年か四年か五年ごとに一定の日にイデオロギー的(あるいはむしろ感情的)優越をしめれば十分である」(青木文庫「新君主論」)と。

以上のようにグラムシ国家論はけっして「民主主義」「議会主義」「平和主義」の物神化とは関係がないばかりか同じ階級支配の「二つの仕方のあらわれ」としてとらえられている。にもかかわらずその国家論は「力と同意」「権威とヘゲモニー」「暴力と文明」「独裁とヘゲモニー」といった機能的な、政治的な把握から一歩もでないために、このそれぞれを分離して把握することを可能とし、トリアッチ主義者によってきわめてプラグマチックに「構造改良」路線の「理論」的支柱に利用されている。もちろんそのことはグラムシ国家論の歪曲的理解をも必然化させずにはおかない。

### 五、マルクス主義国家論とは何か

国家が「独裁+ヘゲモニー」とはどの点でいえることなのであり、どのように統一されているのであろうか。グラムシにとつて「独裁」「支配」「力」とはほぼ同意語なのであるが、これはルカーチが国家を「勢力要因」とみなした(「合法と非合法」)ことに対応

的共同体」として存在するが故である。国家がこのように「幻想的共同体」であるが故に国家は武装部隊たりうるばかりか暴力的たりうるのである。ブルジョア階級は自らをそのようなものとして「合法的」と感じ、ブルジョア支配を「合法的」と感ずる国民の「定部分」を武装部隊として組織、編成し、大多数の国民を「合法的」に支配するのである。それ故に武装部隊は必ずしも国家ではない。

こうした幻想は資本制生産様式からたえず立ちのぼる。資本制生産様式を唯一の永久的な普遍的な社会的生産と感ずる資本制生産様式の物神化、労働者が労働力商品であることを「自由」「平等」「功利」と感ずることのなかから、資本と賃労働の「運命共同体」、企業防衛、「民族共同体」、祖国防衛などのイデオロギーがたえず立ちのぼってくる。この「共同体の幻想」の強化はこの社会的生産様式をイデオロギー的にも実体的にもたえず強化するものとなる。

「支配階級」の思想はどの時代にも支配的思想である。すなわち、社会の支配的な物質的力であるところの階級は、同時にその社会の支配的な精神的力である。物質的の生産の手段を左右する階級は、それと同時に精神的生産の手段を左右する。だから同時にまた、精神的生産の手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に服従していることになる。支配的な思想とは支配的な物質的諸関係の観念的な表現、思想としてとらえられた支配的な物質的諸関係にほかならない。したがって、まさしくその一つの階級を支配階級にするところの諸関係の観念的な表現、すなわちこの階級の支配の思想にほかならない。」「(マルクス「ドイツ・イデオロギー」)つまり国家は対する「幻想」「同意」を生産し、国民を「組織し結

合する要素」(グラムシ)としての「ヘゲモニー」とは「独裁」の別名に他ならず、それ故に「ヘゲモニー」の強化とは「一層」暴力的「たりうる」ことである。

「ヘゲモニー装置」のもとも安定した様式、それが民主主義制度であり、この制度において労働貴族、代議士、弁護士、知識人としての支配階級への「分子的移住」を容易にし、それはまた「同意」を組織するための「世論」制度でもある。

ブルジョアジーの独裁は、その特殊利害を維持し追及するため、その特有の(幻想的共同体として)形態をとるのであって、それはナチ、ファシズム、リベラリターとしてヘゲモニー的でないならば、外部に対しては民族として、内部に対しては国家としてあらわれるのだ。「まさに特殊利害と共同利害とのこの矛盾にもとづいて、共同利害は、個別および全体の現実的な利害からきりばなされて国家として一つの独立な姿を呈する。そしてそれは同時にまた幻想的な共同性としてである」(マルクス『ドイツ、イデオロギー』) 国家は「幻想的共同性」を本質とし、その実体としての「武装部隊」は「ヘゲモニー装置」(裁判所、警察、牢獄、議会など)でなければならず、「暴力的」「民主主義的」「公共的」に現象し、機能することができる。

国家が「一般的」「共同的」としてあらわれるのは「幻想的」にある。ここにこそ国家の神通力があらわれる。国家を単に「暴力」としてのみ評価するのは、「公共的」と評価するのと同じく一つの物神化におちいっている。つまり国家を構成する実体、担い手を、官僚、軍隊を恒久的、不変的と考えることに通ずるのである。それはいつも国家(民主主義、議会主義)制度を通じた変革とか(協同)二七三(ページ)。

このようなものがグラムシの「社会主義へのイタリアの道」と一体どういう関連があるというのだろうか。グラムシは限られてみればこれは完全に反プロレタリア的思想であることがわかる。構改革派がこのトリアッチの提起を「理論」ずけるためにマルクス主義国家論を歪曲して、その場合にグラムシを採用してつぎのようにいつている。国家には「階級的暴力的機能」の側面と「社会的行政的機能」の側面との、または「独裁性」と「公共性」との二つの側面がある。但しグラムシの「独裁性」は明確に階級的なものとして提起されている。ここではマルクス主義国家論の立場から国家論の歪曲についてだけ批判しておきたい。

たとえばジェルラターナによればこの二つの側面のうち、国家の「正当な機能」である「社会的行政的機能」「公共性」の側面が、現代の国家におけます増大していると、彼等は国家の機能を二つに切りはなし、プロレタリアが「公共性」の側面を制限していく過程(議会は立憲法)が社会主義への「構造的改良」で

会派の綱領をみよ)、少数の前衛による極左主義的冒険への道をあけることとなる。グラムシは機能論的だがそうした危険をさけるために「独裁性ヘゲモニー論」を展開しているのだから、トリマツチ主義はこの結論を全体からきりになして最悪の形態で利用しているのである。

## 六、構造改良論の批判

トリアッチは「社会主義へのイタリアの道」をつぎのようなものとして提起している。「われわれは民主主義者である。なぜなら、われわれ、憲法、民主主義的慣習および憲法のさだめる法秩序の範囲内で行動しているからであり、すべての人にこの法秩序を尊重することを要求し、すべての人の側から、なによりもまず為政者の側から憲法のあらゆる規程が実行されることを要求しているからである」(社会主義、民主主義二二八ページ)。マルクス・エンゲルス・レーニンがブルジョア国家機関は社会主義社会の建設に利用することができない、労働者階級自身が指導する国家機関によつてどつてかわらなければならないとした。「今日でも、この立場は完全に有効であろうか?ここに討議の主題がある。事実、社会主義の前進の道が、民主主義の領域で可能であるばかりか、議会の諸形態を利用することによつても可能である、とわれわれが確認するときには」「こうした立場のなかのなにかを訂正しているのである」(同、二六一ページ)。「現在の条件のもとにありながらも、勤労者と中産階級に有利な経済政策、政府じしんに議会をおして反独占主義の行動をおこなわせる経済政策をおしつけるために」「これらの改良」のスローガンとこれまでの「鋭い革命的危機にさいしてか

あり「国家機構の破壊はかならずしも必要がない」とする。たしかに社会法、労働法の領域の拡大、国営企業の増大、財政政策や公共事業の拡大など、国家独占資本主義段階では、いわゆる「行政的機能」の役割りは増大している。だがしかしこのことは国家が独占資本総体の利益を守るために払う努力を意味するだけである。しかも経済危機の深化、市場争奪戦の激化はますますそうした資本の支配の安定のためみせかけの、損のない「譲歩」すらブルジョアジーには不可能となりつつある。つまり公共事業、福祉事業、財政政策は独占資本の搾取と収奪の手段にますます転化するのである(公共料金の値上げ、公債発行など)。こうして国家とプロレタリア人民、国民とのあいだにはますます対立が激化していくこととなる。

こうしたことが不可避なのは国家の「公共性」の性格が本来的に階級的なものであるからである。つまり国家の「社会的行政的機能」の増大とは、その「階級的機能」の増大であり、本質的には国家という「共同性の幻想」が一層強化されることを意味する。「共同性の幻想」の強化はますます国家が暴力的たりうること、その「万能化」、強権化に他ならないからである。

それだけではない。このことは同時に労働者人民からの「公共性」「社会的行政的機能性」をはぎとり、その活動の社会的対象をはぎとり、つまり個性活動をそう失させることとなる。同じことが一方では抑圧として他方ではそう失としてあらわれる。

このことをマルクスはその小冊子で次のように述べた。「すべて共通の利害はただちに社会からはなされ、よりたかい一般利害として社会に對置させられ、社会の成員の自主活動からもぎられ、統治活動の對象にされた村の橋、校舎、公有財産から、フランスの鉄



道、国有財産、国立大学にいたるまで、すべてそうだった」(「ブルエメール十八日」)と。

だからして「国家独占資本主義は構改派とは逆の意味で労働者階級にとつて『有利な局面』をつくっている。つまり国家は『社会からみずからをますます疎外していく権力』(エンゲルス)として最高の段階にあり、その意味で国家を社会から『孤立させ、これを唯一の標的として』(マルクス)革命に对立させるからである。労働者人民はそのうしなつた個性、つまり活動の社会的対象を、まず国家の破壊という活動として再び見出すのである。

ところでそうした国家の「公共性」の妨げはかなる手段によつておこなわれるのか、議会主義的手段によつてである。それ故に、構改派の目的とその手段としての議会主義ということのなかにその本質は一貫して暴露されている。

労働運動、大衆闘争などにおける労働者大衆が自己を前進させ、確固不拔にうらかため政治的なものとして、本来の階級である故に自己を全国的なものとして、『国民的』なものとして登場させるのは、ソヴェイトである。本来的にソヴェイトは大衆行動そのものである。また「ヘゲモニーとは権力をソヴェイトへ」ということである」(「ジノビエフ」ロシア社会民主党史)

だがブルジョア社会では「政治」は議会とか国家の手にとりあげられているために、労働者大衆の自己を政治的な存在にたらしめようとするやみがたい衝動は、その合法的な形態である議会と投票にむかうのである。なぜなら議会と投票という民主主義の形態は、ブルジョア社会で諸利害が全国的な唯一の形態であるからだ。労働者人民はそれ自身として政治的であるにもかかわらず、合法的に政治的

体でなく、ブルジョア国家が「主体」であり、大衆行動は国家にたいする圧力であり、補足であり、請願でしかない。それは労働者階級にとつて自己が手段化され、国家の行動が目的化されている状態を意味する。これはスローガンにおける大衆行動を高揚させる意義ではなく、純粹に「絶対的目標」としての改良のスローガンとこう、改良主義の絶対化と密接に関連している。

以上のことから構改派の主張の反プロレタリア性は明白である。それは国家の階級性を糊塗し、議会主義、資本制国家国家独占資本主義の最悪の美化となつている。それ故に現在すすみつつある資本主義経済の危機は彼等の破産を明白にせざるを得ないのである。そうしてむしろこうしたスターリン主義と社会民主主義の議会主義的またはうらがえしとしての極左主義的なイデオロギーのプロレタリアートに対する世界的な汚染こそが現代の民主主義(ブルジョア独裁)の支えとなつているのだ。

革命的議会主義は以上のような議会主義と無縁である。それはつぎのような立場にたつてプロレタリア革命運動、ヘゲモニーのための闘争を有利にするためにのみ提起されている。議会主義が「大衆にとつても老いぼれてるとみなすべきでない」(レーニン)現実にあつては、革命党は「労働者人民の政府与党に反対を表明する」ために投票するという議会に幻想を持ったままの部分をも含め、自己を政治的存在にたらしめようとする労働者人民の政治的衝動と意志を介入し、そうしてそうした衝動と意志が、みずからの行動と経験を通過してその限界をのりこえて前進しようように指導し、大衆の一票一票を現実の反乱(議会とその幻想の破壊)大衆行動の契機として組織するために闘うのである。

であることを認められているのは投票行為であり投票だけである。だから投票は労働者人民が「政治的」であり「立法者」「執行者」であることの幻想である。

選挙権の行使は、現実の行為としてではなく、幻想的には労働者人民が現実の政治にとつてかわろうとする行為の公認である。それは国家だけが行う政治に対して人民が国家に変わつて「政治」を行い、国家に対して「政治」を行う幻想(主権在民)の現存である。グラムシもマルクスにならつてであろうがいつていることであるが

「すべての官職の選挙制という人民の要求、極端な自由主義であると同時に、その解消でもある要求がでてくる。」またブルジョア民主主義はある程度「この根源的な人民の要求にたいして幻想的な満足にあたえている」(文庫一五一ページ)。

これは国家に対する幻想的な「反乱」行為、形式的な「内乱」行為である。これは国家の内部での国家に対する人民の「反乱」を前提にしなければ、国家はその外部で人民の現実的な「反乱」の前にたたなければならないからである。

もちろん国家内部での(国家制度)憲法(議会主義内部での)「反乱」であるから、現実には現存の国家制度への同意として、容認として結果する。そして労働者人民は現実には自己をますます非政治的な存在として、国家と議会は政治的な存在として立ちあらわれることになる。

こうして国家の「公共的」機能の拡大、議会によるその促進ということは、本質的には労働者階級の行動なしに、労働者階級の行動に對してということである。たとえ労働者人民の「大衆行動を強めつつ」ということをいくら強調しても、大衆行動ソヴェイトが主

労働者人民の棄権が、議会の破壊たりうる棄権でないかぎり、革命党の棄権への呼びかけは、ブルジョア政治、国家、議会、選挙などに対する空論的な、精神的な否定にすぎず、現実的にはブルジョア支配への完全な屈服、政治的下僕としてあらわれる。そのうえ労働者人民の政治的衝動は、議会と議会主義的党派、ブルジョアジーによつて組織されるがままに放置され、資本家階級の支配と安定として結果し、階級闘争の後退を助けることとなる。そして革命党は自らをいつまでも階級本隊はもとより国民的諸階層と切断された一セクト的グループ以上をでることもなくまた党たりえない。

## 七、グラムシの実践の哲学について

いわゆる「平和革命」、「議会的手段による革命」、「構造的改良」などがグラムシにとつて批判の対象でしかないことは、彼の「実践の哲学」論から問題をなげれば明白になるのである。実際、「ヘゲモニー論」「陣地戦」論、「党」知識人」論はそうしたグラムシの史的唯物論把握から流れだした有効な理論に他ならない。民主主義的、平和的、構改派的理論の破産はつぎのように質問すればたちどころにその馬脚をあらわすのである。

つまり、プロレタリアートが自らを意識し、認識するためにブルジョア国家を媒介にすることができたらどうかと。グラムシにとつてそうした間がマルクス主義者の口に出ること自身考えられぬことであつた。「人間性」とは「社会諸関係の総体」である。「人間はイデオロギーを場として構造の矛盾を意識する」「構造と上部構造とは、一つの、歴史のプロック」を形成する。グラムシはその理論のすべてをたえずこの史的唯物論の原則から出発させる。



どのようにそれを規律づけ、どのようにそれに政治的形態をすべきか。その形態は、それじたいとして正しく発展する力、たえず自己を綜合する力をもち、ついには社会主義国家の骨らねばならぬ。そして、その社会主義国家のなかに、プロレタリア独裁が具体化するのだからなければならない。現在の緊急な必要を足さず、また一方では、未来を創造し、予想する「ため」を有効に行いつつ、現在を未来にいかにか容接すべきか。」(『選集5』「労働者民主主義」十三ページ)「工場内部委員会は、工場内の資本家の権力を制限し、裁定と規律の機能を展開し、これは発展し豊富になり、明日にはプロレタリア権力の機軸、指導と管理の有用な機能のすべてにわたって、資本家に代わらるにちがいない。今ただちに労働者は、最良のもっとも高い同志たちのなから選ばれた代議員の大集会をひらく選挙の準備にかならなければならない。そのスローガン場の全権力を職場委員会へ」であり、さらにこれと並べて「全権力を労働評議会へ」である。」(同前五一ページ)「(社会主義者は)民主制国家の諸機構の永久性を信じ、それらには完成されたものであるという、自由主義経済学者ふうな錯覚に、かれらもまたおちいついて、かれらにいわせ「主制諸機構の形態は、そこここに手を加えて矯正すること」であり、基本的には尊重すべきものである。「われわれ社会主義国家が資本主義国家の諸機構のなかに肉体化するにないこと、社会主義国家は新しい創造物であることを信

はない。つまり、経済的、連帯主義的な実践、風俗の確立ではない。そうではなくて、過渡期の国家であって、私有財産、階級、国家経済の抑圧をもって競争を抑圧するという任務をもっている。ところでこの任務は、議会制民主主義では実現できない。」(『グラムシ選集5』「国家の獲得」二三ページ)

グラムシは「新君主論」においてもつぎのように経済主義の領域内でのプロレタリアの「政治的」行動の限界について提起している。

「国家の問題が提起されるが、それは支配諸集団との政治的―法律的平等の達成という場にかぎられている。なぜなら、要求されるのは、立法や行政に参加する権利、さらには立法や行政を修正し、改革する権利があるが、これは現行の基本的枠内でのことである。」(『青木文庫』「新君主論」九八ページ)

ところがプロレタリアートのヘゲモニーが確立された場合について、「そのさき、国家とは当然、ある社会集団そのものの最大限の膨張を助ける諸条件をつくり出すための、その社会集団の専属機関とみなされるが、この膨張は、普遍的膨張の、『国民的』、エネルギー全体の発展の原動力とみなされ、また、そのようなものとして現われることとなる。」(同前九九ページ)

グラムシは「憲法や議会とともに、自然な『進化』の時代がはじまった」とする「見方の結果おこる国家の概念の貧困化」(『文庫』「新君主論」七二ページ)を嘲笑している。グラムシにとってプロレタリアートは「新しい秩序」をつくり、その担い手となることに

「人間性」に新しい「社会的諸関係の総体」にならない。そうした存在なのだ。ブルジョア国家という「上部ブルジョアの『構造』」を前提している。プロレタリア「記者としての上部構造」国家、イデオロギーを生産し、しえない。それこそが「ヘゲモニー論」の問題意識で

「の問題意識は一つ一つ正確に初期のそれに照応するのは発展であり、具体化である。トリアッチ主義者の初期の論文が単なるレーニンの口うつし、初期コミ、りかえしにみえる。だが初期の論文は『獄中ノート』すべて内包している。グラムシの初期から死までの追究」論、つまり「ソヴイェト権力」論、「国家死滅」論、

「新君主論」で直接にソヴイェトを論じた、個別的人間(二八ページ)、「官僚制」のなかの「有機的人間」(二八ページ)、「代議制における数と質」(一五三―三九ページ)、「代議制における数と質」(一五三―三九ページ)、「指導」(一八六―二一六ページ)などばかりではない。「新君主論」は知識人、プロレタリアートとソヴイェトといふ装置によって自己を意識し、自己を自主的、自律的なものとすることができる。これがプロレタリアートの「民主主義」である。これがグラムシの把握である。

「新君主論」は知識人、プロレタリアートとソヴイェトといふ装置によって自己を意識し、自己を自主的、自律的なものとすることができる。これがプロレタリアートの「民主主義」である。これがグラムシの把握である。

ロギーの武器こそが「実践の哲学」としてのマルクス主義である。ところで「実践の哲学」はグラムシにあっては自立的な階級としての自己意識に他ならない。「大衆活動家は実践的に行動するが、それが変革するかぎりの世界の認識にはかならないかれの行動についての明瞭な理論的意識をもっていない。かれの理論的意識は歴史的にはかれの行動と対立していることさえありうる。かれは二つの理論的意識(あるいは矛盾した意識)をもっているということもできよう。」「自己自身の批判的理解は、だから現実についての自分自身の考え方の高次の仕上げに達するためにはじめは倫理の領域において、つぎには政治の領域においてたかかわれる政治的『ヘゲモニー』の闘争、対立する指導の闘争をつうじておこなわれるのである。一定の主導的勢力の部分であるという意識(すなわち政治意識)は、理論と実践とがつかいにはそこで統一される今後の前進的な自己意識に達するための最初の段階である。」(『若干の予備的参照点』選集1二四八ページ)このような哲学と政治、思想と存在、理論と実践の統一としての実践の哲学およびヘゲモニー装置としてボルシエヴィキ党の意義についての、唯「唯一の『哲学』は、現実の歴史、すなわち生活そのものである。ドイツ古典哲学の相統者であるドイツ・プロレタリアートという命題は、この意味に解釈することができるし」またレーニンのヘゲモニーの理論化、「ヘゲモニー装置の実現は新しいイデオロギーの地盤を創造し、意識と認識方法との改革を規定するかぎり」で「認識論的な意義をもつものとされる」(『文庫』二二―二四ページ)。

ヘゲモニー装置としての党について「若干の予備的参照点」のなかで次のように述べている。「批判的な自己意識というのは、歴史

独立した、対目的なものではない。知識人なれば組織は

ある層において具体的区別されるのでなければ、組織はない。「現代の世界において、本質的には政党が世界観に合致した倫理と政策を仕上げるかぎり、いいかえれば、政党がほぼ世界観の歴史的「実験家」といった機能をはたすかぎり、世界観の仕上げと普及において政党がもっている意義と重要性を強調することが必要である。政党は活動的な大衆を個人的に選抜する。そして、その選抜は実践の領域においても理論の領域においてもおこなわれるが、世界観が古い思考様式をその死活にかかわるような根本的な仕方では革新するものであり、それと敵対するものとして現われるものであればあるほど、この選抜は理論と実践とのあいだにますます緊密な関係をもちおこなわれる。それゆえ、政党は全面的な、全体的な新しい知性の彫琢者、いいかえれば、現実の歴史的過程という意味での理論と実践との統一の坩堝である、ということができる。また、そこから、党が個人加盟によって形成されること、「労働党」型のものでないことがどれほど必要であるかも理解される。」(グラムシ選集I「若干の予備的参照点二五〇ページ」) そうした党がポルシェウイキ党に他ならないことは『新君主論』を読めばあまりにも明白である。

「発展と再組織は不可能とみなされる伝統的な勢力にもとづいて

打算するだけでなく、新しい独創的な力をよびだすことをめざす」(『新君主論』文庫八四ページ)。ヘゲモニーのための闘争において決定的なのは「陣地」戦である。戦争論における機動戦(運動戦)Ⅱ(政治闘争における武装蜂起をさす)と陣地戦(攻囲戦)(要塞戦)という用語を政治闘争に適用したものである。①まず前提的ことは、まったく考えられないという経済主義批判がある。②「東方では国家がすべてであり、市民社会は原生的で、ゼラチン状であった。西方では、国家と市民社会のあいだに適正な関係があり、国家は第一線状態にすぎず、そのうしろには要塞と砲台の頭状な系列があった。」「問題は現代国家に提起されるのであって、ほかのところでは克服され、時代錯誤的になった形態がまだ生きていて後進国や植民地に提起されない」という、国民的性格のちがいがからこれが提起されていることである。レーニンはその「左翼小児病」でロシア革命とそれを指導したロシア共産党をロシア特有の条件に帰すことに反対したが、グラムシがこれを知らない筈がなく、むしろコミンテルン第三回大会(レーニンはそのときこの画期的な小冊子をかいた)におけるレーニンの統一戦線の提起を深める立場に立つて、その「陣地戦」論を展開していることである(同、二〇二ページ)。それ故にこの「東方」と「西方」の対立的な提起はレーニンの「資本主義が発達し、最後の一人まで民主主義的文化と組織性」とがた

の萌芽を示すものであった。『新君主論』の「陣地」論は、一九一八年以前に現われ、一七八九年から一八四八年までのジャコパンの経験を経験を科学的にねりあげた表現としてのいわゆる「永続革命」の政治概念。この定式は、大きな大衆の政党と大きな経済的組合がまだ存在しておらず、社会がまだ多くの点でいけば流動状態にあった歴史的時期に固有なものである。「一八七〇年以後の時期には、ヨーロッパの植民地的膨張にとまらぬ、これらすべての要素が変化し、国家の国内および国際的な組織的關係は、より複雑になり、より精密になり、「永続革命」の一八四八年の定式は、政治学では、「市民的ヘゲモニー」の定式にねりあげられ、克服された。政治技術でも、軍事技術に生じたのと同じことが生じた。運動戦はますます陣地戦に変わり、国家は、平和時に細心に技術的に戦争を準備するかぎり戦争に勝利することができる。現代民主主義の精密な構造は、国家的組織体であれ、市民生活における複雑な諸結社であれ、政治技術にとどまらず、陣地戦における「壘壕」と前線永久堡壘をなしている。それは、以前には戦争の「すべて」であった運動の要素を、たんに「部分的なもの」にしている、等々。」(『文庫』三一ページ) この「永久革命」の一八四八年の定式」に対する批判は明白に「フランスの階級闘争」のエンゲルスの「序文」における一八四八年当時のマルクス・エンゲルスの考えた「永久革命の定式」の失敗したことの総括と正確に対応している(M・E選集第五巻上、一五八一―一六三ページ)。実際、あらかじめの大衆の獲得といふ意味で、レーニンの第三回大会の形に照らしての「陣地戦」の正確

の形を指示するものであった。『新君主論』の「陣地」論は、一九一八年以前に現われ、一七八九年から一八四八年までのジャコパンの経験を経験を科学的にねりあげた表現としてのいわゆる「永続革命」の政治概念。この定式は、大きな大衆の政党と大きな経済的組合がまだ存在しておらず、社会がまだ多くの点でいけば流動状態にあった歴史的時期に固有なものである。「一八七〇年以後の時期には、ヨーロッパの植民地的膨張にとまらぬ、これらすべての要素が変化し、国家の国内および国際的な組織的關係は、より複雑になり、より精密になり、「永続革命」の一八四八年の定式は、政治学では、「市民的ヘゲモニー」の定式にねりあげられ、克服された。政治技術でも、軍事技術に生じたのと同じことが生じた。運動戦はますます陣地戦に変わり、国家は、平和時に細心に技術的に戦争を準備するかぎり戦争に勝利することができる。現代民主主義の精密な構造は、国家的組織体であれ、市民生活における複雑な諸結社であれ、政治技術にとどまらず、陣地戦における「壘壕」と前線永久堡壘をなしている。それは、以前には戦争の「すべて」であった運動の要素を、たんに「部分的なもの」にしている、等々。」(『文庫』三一ページ) この「永久革命」の一八四八年の定式」に対する批判は明白に「フランスの階級闘争」のエンゲルスの「序文」における一八四八年当時のマルクス・エンゲルスの考えた「永久革命の定式」の失敗したことの総括と正確に対応している(M・E選集第五巻上、一五八一―一六三ページ)。実際、あらかじめの大衆の獲得といふ意味で、レーニンの第三回大会の形に照らしての「陣地戦」の正確

ブルジョアジーの「陣地」としての社会民主主義、議会主義、労働組合主義、民主主義の克服Ⅱプロレタリアートのヘゲモニーのための闘争、これが「陣地戦」である。『獄中ノート』にはつぎのような彼のいう「西方」「陣地」の指摘がみられる。

「ジャコビニズム(内容上の)の発展、および、フランス革命の前進の段階で発見した永久革命方式の発展は、その法律的憲法的「完成」を議会制度のうちに見出している。」「ジャコバン主義者がル・シャブリエ法や最高価格令のうちに見出した「限界」は、宣伝活動と実践活動(経済的、政治的―法律的)が交錯する全過程をつうして順次にのりこえられ、遠くへおしやられる」(グラムシ選集I「フランスの国民生活についての覚え書」二一五―二二二ページ) (ル・シャブリエ法は最高価格令を指す)

ブルジョアジーの「陣地」としての社会民主主義、議会主義、労働組合主義、民主主義の克服Ⅱプロレタリアートのヘゲモニーのための闘争、これが「陣地戦」である。『獄中ノート』にはつぎのような彼のいう「西方」「陣地」の指摘がみられる。

「ジャコビニズム(内容上の)の発展、および、フランス革命の前進の段階で発見した永久革命方式の発展は、その法律的憲法的「完成」を議会制度のうちに見出している。」「ジャコバン主義者がル・シャブリエ法や最高価格令のうちに見出した「限界」は、宣伝活動と実践活動(経済的、政治的―法律的)が交錯する全過程をつうして順次にのりこえられ、遠くへおしやられる」(グラムシ選集I「フランスの国民生活についての覚え書」二一五―二二二ページ) (ル・シャブリエ法は最高価格令を指す)

「一七」は革命的議会議主義と関連させてつぎのようにのべている。「大衆闘争において、プロレタリアートの指導党は、あらゆる合法的障地をうちかため、革命的活動の補助的な支点となし、かつこれらの障地を大進軍、大衆闘争のキャンパニア計画に従属させなければならぬ。ブルジョア議会の壇上はそのような補助的支点の一つである。これがグラムシの立場なのだ。グラムシにとっては労働組合もまたそうしたブルジョアジとプロレタリアートの二つのヘゲモニーの間の争奪戦の位置を占めている。それゆえに労働組合の獲得は、意識的努力なくして（経済主義批判なくして）はありえない。経済危機、よく組織された少数の前衛の「正面攻撃」などで組合が動かせるものではない。このことは、一九一九年の「労働組合と評議会」で労働組合について「ある意味ではそれは資本主義社会の補充物である」とのべている。こうした組合物神化とは無縁な態度であるからこそ、一九二七年のイタリア共産党が採用したファシズム労働組合内部での闘争、というグラムシの獄中からのするどい指令がでてくる。

それ故に「障地戦」とはエンゲルスがいわゆる一八四八年の「永久革命」の定式を「克服」してのべたことを一層具体化しているのである。つまり「奇襲の時代、すなわち意識のない大衆の先頭に立った意識ある少数者が遂行した革命の時代はすぎさった。社会組織が完全に変革されるためには、大衆自身がその変革にくわり、彼ら自身が、問題の本質はなにか、なんのために彼らは身体と生命をかけて行動をおこすのかを、みずからすでに理解していなければならぬ。このことを、吾々に最近五十年の歴史がおしえてくれたのだ。だが、大衆がなにをなすべきかを理解するためにはそのために

はながいあいだの忍耐つよい仕事が必要である。」（エンゲルス『フランスにおける階級闘争』序文）

以上のことから明らかのように、「障地戦は、暴力革命的な機動戦や突撃戦に比べて、民主的・平和革命的である（柴田）『平和革命』論の歴史的系譜』思想八月号」という形式主義的、機械的理解はグラムシには無縁であって、そのことは「あらゆる政治闘争はつねに軍事的基体をもっている」（文庫一九二七ページ）「政治は軍事的側面よりも上位にたたなければならず、政治だけが機動と運動の可能性をつくりだす」（文庫一九六ページ）という障地戦（政治闘争）と機動戦（武装蜂起）の弁証法的把握にみることが出来る。

「どのような情勢下でも、決定的力とは、恒常的に組織され、長期にわたって整備された力、情勢が有利であると判断するや、前進できる力である。したがって、本質的任務とは、この力そのものを形成し、発展させ、ますます等質的な、充実した、自覚的なものにするために、系統的に、忍耐つよく待つことである。」「あらゆる時代をつうじて軍隊は、このような配慮をもって、いつなんどきでも戦端をひらく用意をととのえていたのである」（文庫一〇四ページ）

グラムシのトロツキー批判は、まずトロツキーの「永久革命」論を徹頭徹尾歪曲することからはじまる。つまり単なる永久革命のいわゆる「一八四八年定式」というよりはプランキズムに対する批判にすぎない。しかもつとどいしろのものであって「敗北の原因でしかない時期における正面攻撃の政治理論」（文庫一九七ページ）という把握である。コミンテルン第三回大会でいわゆるグラムシのいう「障地戦」——統一戦線論およびあらかじめ大衆の獲得を提唱したのはレーニンとともにトロツキーであったこと、グラムシ理論

にとつてもその前提となつている世界革命を定式化したのもレーニンとトロツキーがあり、トロツキーの永久革命論が世界革命論を本質としていたことを故意に無視し、捨象し、そのことについてはなにものべていない。グラムシのトロツキー・ローザ批判はほとんど彼等ののべたこととは関係のないことを批判している。だがグラムシがトロツキーを批判したという事実はトリアッチによってその後徹底的に政治的に利用されている。

ここでついでにのべておけば一九二七年モスクワのトリアッチがコミンテルンでスターリンのトロツキー批判に対して民主主義的理由によつて保留しようとした態度（シローネの証言「神はつまづく」）とはほとんど同一の中間主義的態度が、逮捕、投獄直前のグラムシの態度ではなかったか、ということである。なおトリアッチによればグラムシは獄中で他の獄内の同志がトロツキー的になったときに「トロツキーは、ファシズムのふしだらな女」である、という意味深長なスローガンを与えたということであるが、こうしたトリアッチの証言しかえられないことは意味深長な事実も別にあるのかもしれない。ともあれグラムシははつきりとトロツキーに対してスターリンをボリジエヴィキとして擁護した（文庫「国際主義と国民的政治」一九七ページ）。それはスターリン主義者によつて政治的に利用されてきた。だがトロツキーのものとしてではなくそのスターリンのものとして与えられている内容——「発展は国際主義にむかっているが、出発点は『国民的』であり、この出発点からスタートしなければならぬ。しかし展望は国際的であり、国際的でしかありえない。それだから国際的階級が国際的な展望と指針にしたがって指導し、発展させるべき国民的諸勢力の結合を、精密に研

究する必要がある。指導的階級は、この結合を精密に解剖するときだけに、指導的である。この階級そのものが結合の構成成分であり、まさにそうであるかぎりにおいて、運動に、一定の展望における一定の方向をあたえることができるのである。」「国際的性格の階級は、厳密に国民的な諸社会層（知識人）、さらに時としては、まだ国民的でない、割拠主義的、自治体主義的なそれ（農民）をも指導するかぎりである意味ではみずから、国民化しなければならぬ」。これがスターリン主義者のものでないことは明白であり、スターリン主義からではなく革命的マルクス主義からのみ発展させることのできる内容なのである。